

〈共同研究〉 称名寺聖教『法事讚光明抄』について (三)

— 「少善根」 「随縁雑善」 理解に対する一考察と卷三翻刻 —

佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳

Some Notes concerning the 『法事讚光明抄』 (三)

Contained in the Shomyoji Temple

Shinjo SATAKE, Shin'ei AKAMATSU,

Keisai NISHIMURA, Keijun INOUE

岐阜聖徳学園大学

仏教文化研究所紀要第21号

2021年3月

## 〈共同研究〉 称名寺聖教

### 『法事讚光明抄』について (三)

―「少善根」「随縁雑善」理解に対する一考察と卷三翻刻―

佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳

#### 要旨

『法事讚光明抄』四卷は神奈川県称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)になる国宝称名寺聖教の中の一書であり、善導(六一三―六八一)撰『法事讚』二巻を註釈したものである。撰者は法然(一一三三―一二二二)の門下の一人である覚明房長西(一一八四―一二六六)である。全四巻のうち巻一・二については概要とその翻刻を報告済みであり、本稿はその続編にあたり、巻三の翻刻ならびにその内容について一考を加え、中世浄土教研究の進展に資することを目的とする。

キーワード 法然 覚明房長西 九品寺流 少善根 随縁雑善

#### はじめに

小論は、「〈共同研究〉称名寺聖教『法事讚光明抄』について(一) 概要と巻一翻刻<sup>1)</sup>」および「〈共同研究〉称名寺聖教『法事讚光明抄』について(二)―所引の『阿弥陀経』註釈書からみる展望と巻二翻刻<sup>2)</sup>」と題して発表した論攷の続編であり、称名寺聖教『法事讚光明抄』巻三の翻刻を掲載するものである。したがって、概要ならびに巻一・二の翻刻は前稿を参照願いたい。また、巻三の翻刻を紹介するにあたって、九品寺流の諸師における「少善根」「随縁雑善」の理解について考察してきたい。

「少善根」「随縁雑善」理解に対する一考察(井上)

『法事讚疑芥』<sup>3)</sup>巻三には、『法事讚』巻下の転經分第一段の「捨彼莊嚴」(『聖典全書』一、八三〇頁)から第十段の「貪瞋即是身三業」(『同』一、八四四頁)までが積されている。このなか注目されるのが、『阿弥陀経』における少善根と多善根に関する議論、所謂「嫌貶開示」についてである。『法事讚疑芥』における「嫌貶開示」理解については、既に佐竹真城氏が指摘しているように、良忠(一一九九―一二八六)撰『法事讚私記』との関係が窺える。すなわち、良忠が『法事讚私記』において「或人云」として引用する理解が、『法事讚疑芥』巻三の記述とほとんど一致するのである。「或人」とは長西のことを指していると考えられるが、その理解に対して良忠は、二つの点から批判を加えており、結果的に長西と良忠の「少善根」に対する理解に相違が生じていることがわかる。

この点について、九品寺流と鎮西義とで立場を異にする二師の間で理解が異なるのは、ある意味当然ともいえる。しかしここで注目すべきなのが、九品寺流において長西の門弟と位置づけられている人師の理解においても、長西の理解とは多くの違いが見られることである。本稿ではその相違を明らかにすることで九品寺流、ひいては法然門下研究における一視座を提供したい。具体的には『阿弥陀経』所説の「少善根」、そしてそれを受けて『法事讚』に説かれる「随縁雑善」の語がどのように理解されていたのかを、各師の『法事讚』註釈書の記述から検討する。

なお、長西には多くの門弟がいたことが諸系図から知られるが、そのなか今回は、長西の直弟子に位置づけられている念空道教(？―一二八七)・阿弥陀房(一二〇〇―一二八七)に加え、孫弟子に位置づけられる性仙導空(生没年不明)を取り上げる。

## 法然の理解

九品寺流諸師の理解を検討するにあたって、法然の解釈を確認しよう。『選択集』多善根章では、はじめに『阿弥陀経』「嫌眩開示」と『法事讃』「随縁雑善」の文を引いたのち、私釈において以下のように述べられている。

私云、「不<sub>レ</sub>可<sub>下</sub>以<sub>二</sub>少善根福德因縁<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>者、諸余雑行者難<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>。故云、「随縁雑善恐難生」。「少善根」者对<sub>二</sub>多善根<sub>一</sub>之言也。然則雑善是少善根也、念仏是多善根也。

（『聖典全書』一、一三一七頁）

法然は、少善根⇨雑行⇨雑善とし、多善根⇨念仏と理解していることがわかる。ここで確認しておきたいのは、『阿弥陀経』の「少善根」も、『法事讃』の「随縁雑善」も、法然においては同じく雑行と理解されていることである。これを前提に、以下において九品寺流の諸師の「少善根」「随縁雑善」の理解を窺っていくこととする。

## 長西の理解

まず「少善根」について、長西は先達の理解として諸師の説を引用した後、以下の問答を設けている。

尋云、付「不可以少善根」等之文、諸師作異解有二何由一歟。

答。於所釈经文分明、諸師全不異解。文相幽玄、異解不同也。而今雖説「少善不生」、未明「少善之相」。而今案「此文意」有「其二意」。

一、次下説「執持名号得生」。故知、指「名号外自余諸善」、云「少善不生」一歟。二、説「一心不乱即得往生」。故知、設雖「執持名号」非「一心不乱」云「少善不生」一歟。有「此道理」一故、諸師各異解也。

又雖「余行」、一心不乱行之即得往生也。何云「少善不生」一歟。又雖「名号」、非「一心不乱不可<sub>レ</sub>生」。何云「即得往生」一歟。故知、「経」意、大約「安心厚薄」説「少善不生」也。然則、人師「解釈」多分約「安心浅深」、釈「少善不生之義」也。（卷三、二二丁左）

ここでは「少善根」として、

(一)：執持名号以外の諸善

(二)：非「一心不乱」の執持名号

という二義が挙げられている。なお、長西における「執持名号」とは必ずしも称名念仏に限らないことに注意が必要である。よってここでは広い意味での念仏を指して「執持名号」と述べていると考えられるが、注目されるのは、第二義として、念仏であっても「一心不乱」でなければ「少善根」である点である。次に「随縁雑善」については、

疑云、「随縁」之義如何。答。随機縁也。八万正教、共随縁教也。然而今別取「一法」、指「其外」云「随縁」也。

又「雑善」者何等歟。答。念仏外諸行也。此即正雜二行中雑行也。（卷三、二四丁左）

と述べられている。ここでは「随縁雑善」は念仏以外の諸行、すなわち雑行を指すと理解されることがわかる。

以上、長西の理解の特徴としては、「少善根」に二義を示し、執持名号を必ずしも多善根として取らない点にあるといえる。

## 長西の門弟における理解

## 阿弥陀房の理解

次に阿弥陀房の理解について見ていこう。既に指摘されているように、長西の著作群である〈浄土疑芥〉<sup>10</sup>には、所々に「私云……」として述べられる箇所が見られるが、これは阿弥陀房の解釈であると考えられて

いる。そしてその理解は、直前にある長西のものと異なる場合も多く、『法事讚疑芥』における「少善根」や「随縁雑善」の解釈についても、長西とは異なる理解が示されている。先ほど確認した、長西が「少善根」に二義を挙げる文の直後に、以下の記述が見られる。

私云、付「随縁雑善恐難生」等之文、料簡之有四意一、  
 歟。謂、一、余行疎雜、故、云不生。如深心下積、雖可廻  
 向得生衆名疎雜行也。二、余行散心、故、云不生。如三下  
 品上生積、聞經十二部心散故滅罪輕等也。此二義於二具足三  
 心人、与奪之意、且云不生也。又「経」説得生者云、「一心  
 不乱」、積云、「專復專」等。此約一行相一積一得生也。三、余  
 行、不具三心者、云不生。如三元照「小経疏」云、「无正信  
 廻向願求」等也。四、念仏、不具三心者、云不生。如三智  
 円「小経疏」云、「等閑発願散乱称名」也。此二義於三不具三心  
 人、以二実義云不生也。又「礼讚」序、積三不生者、云、「若  
 欲捨專修雑業者希得一二……千中无一」等、此約安心、云不  
 生也。又此四義中、初二義、假令義也、容有義也。後二義、眞実義  
 也、必然義也。（卷三、二二丁左―二二丁右）

この直前で長西は「少善根」を積しているが、「随縁雑善」についての解釈が述べてられていることから、阿弥陀房は「少善根」と「随縁雑善」を重ねて理解していると考えられる。その証として、長西が「随縁雑善」を積している箇所にもほとんど同文が示されている。ここで、阿弥陀房は不生の理由について四義を挙げている。すなわち、

- (一) 余行は疎雑なるが故に不生
- (二) 余行は散心なるが故に不生
- (三) 余行には不具三心の者を挙げて不生
- (四) 念仏にも不具三心の者を挙げて不生

である。このうち(一)(二)については假令・容有の義、(三)(四)の義が眞実・必然の義であるとする。ここでの假令・容有の義が具体的にどういった意なのかは一考の余地があるが、(三)(四)を眞実義であるとする点に鑑みると、阿弥陀房は余行・念仏どちらにおいても、不具三心の者は不生であると理解していると考えられる。つまり、「不可以少善根」とは、不具三心の行を指しているということになる。上において長西は、念仏であっても一心不乱でなければ、少善根の行であり不生であるとしていた。一方で阿弥陀房は、念仏において不具三心での行を不生であるとしており、相違が見られる。また長西が「随縁雑善」の文を積した後には、阿弥陀房は以下のように述べている。

私云、(中略)若爾者、釈文「極楽无為涅槃界」者讚嘆所生淨土。一、「随縁雑善」者約三往生修因。謂「雑」者能雜也。「善」者所雜也。付「能雜」有レ三。一、三業善行、当レ「礼讚」四修中无余修下「不雑余業」。二、身口衆務悪業、当レ「無間修下」不以余噴業来間。三、意地妄念、当レ「無間修下」不以貪嗔煩惱来間也。「善」者念仏善也。「恐難生」者当レ「一二三五乃至千中无一」也。意云、「観経」義、念仏諸行、広積三往生行。「礼讚」一向付三業念仏一行勸進。故、簡三余行悪業等。今付二名号一行、云「随縁雑善恐難生」、对レ「執名号之一法」故。又「経」云「不乱」、積「專復專」。若不「專復專」、設執三持、名号一往生不可歟。（卷三、二五丁左）

ここでは「雑善」の「雑」は能雑、「善」は所雑とされ、所雑の善とは念仏の善のことと理解されている。つまりここでの「雑善」とは、法然や長西のように雑行自体を指しているのではなく、念仏という「善」の修し方を指して「雑」としているのである。具体的には四修のうち、(一)無余修の「不雑余業」、(二)無間修の「不以余噴業来間」、(三)無間修の

「不以貪嗔煩惱來間」が挙げられている。「少善根」積の直下では三心の不具による不生の義が示されていたが、ここでは四修ではない修し方による不生として理解されている。なお、この直後に前に引用した四義が再び述べられている。

### 道教の理解

道教撰『法事讚見聞集』の断簡と考えられている『阿弥陀経抄』<sup>13</sup>には以下の記述が見られる。

今ノ經文ニ証ニ願行ニ門一。從ニ「又舍利□衆生者」一。至ニ「得生彼國」一。勸ニ發願一。從ニ「舍利弗一。至ニ「故証此言」一。勸ニ行門一。故分ニ今文段一。以ニ「少善根」一。文ニ屬ニ發願末一。明知、此言爲レ勸ニ發願一也。意ニ云、爲ニ往生極樂一。可ニ發ニ菩提願一。无レ願、人天修因一。不生也。非レ可ニ評ニ成ニ生雜因一之諸行上。

(「能島」二〇頁、四丁裏)

ここではまず、『阿弥陀経』には願行二門が説かれているとされる。その中「又舍利弗衆生者」から「得生彼國」までは發願を勧める箇所のみであるから、「少善根」等の文は菩提心の願を發することを勧める文であると理解している。そして菩提心の願が無ければ人天の善根であり不生とする。故に、道教において「少善根」とは人天の善根を意味しており、それはすなわち無菩提心の行と考えられていたことがわかる。

続けて道教は、

難ニ云、今師下ノ「讚」ニ云ニ「隨緣雜善恐難生」一。此釈引ニ上ノ「少善根」一、來ニ云ニ「隨緣雜善」一。是即正雜ニ行中嫌ニ雜行一、云ニ「難生」一。雜行者不レ限ニ人天修因一、正行外一切諸行一。(中略)是等積惣指ニ念仏外諸行一云ニ「少善根」一。雜善別不レ限ニ人天善乎。

(「能島」二二頁)

と難を立てている。すなわち、『法事讚』「隨緣雜善恐難生」とは『阿弥陀経』「少善根」を受けているのだから、「少善根」が人天の善根であれば、「隨緣雜善」も人天の善根になってしまう。しかし「雜善」とは雜行のことであり、人天の善根に限られるものではないという難である。それに対しては、

會ニ云、(中略)又下云、「人天少善尚難弁、何況無爲証六通」<sup>14</sup>。此「讚」意ニ云、衆生流轉之間人天少善根尚難レ弁。故多受ニ三途苦一。況ニ生ニ無爲淨土一証ニ六通一乎。是則引ニ經文一「少善根福德因緣」一、來ニ云ニ人受ニ少善一。引ニ經文七日一心不乱行生ニ彼國一□□益上、來ニ云ニ「何況無爲」也。

(「能島」二〇頁)

と答えている。『法事讚』の「人天少善尚難弁、何況無爲証六通」の文言について、「人天少善」は『阿弥陀経』「少善根福德因緣」に対応し、「何況無爲」は一心不乱の得生に対応するのだとして会通をはかっている。そして続けて、

准ニ此釈ニ「隨緣雜善」言、可レ謂ニ人□□根一。

(「能島」二二頁)

と結論づけている。ここでは「人□□根」と二字の湮滅があるものの、ここまでの議論に鑑みれば「人天善根」とあったことが推測される。すなわち道教においては、「少善根」も「隨緣雜善」も共に人天への生因となる善根のことを意味していることがわかる。

### 導空の理解

導空撰『法事讚下管見鈔』では、『法事讚疑芥』にも引用されている元照『阿弥陀経疏』「正信廻向願求」の文が引用された後、以下のように述べられている。

解曰、是无菩提心諸善積ニ「少善根」一也。今師下釈云ニ「人天少

			少善根	隨縁雑善
法然	称名念仏以外の雑行	称名念仏以外の雑行		
長西	(一)念仏以外の雑行 (二)非一心不乱の念仏	念仏以外の雑行		
阿弥陀房	不具三心の行	(一)四修でない念仏 (二)不具三心の行		
道教	人天の善根（無菩提心の行）	人天の善根		
導空	無菩提心の行	無菩提心の行		

善<sup>ト</sup>「斯謂也。故『智論』云、「若世間中諸衆生、業因縁故如三循還<sup>スルガ</sup>。福德縁故生天上」、雜業因縁故人中。」<sup>上</sup>无菩提心善根、是雜業也、雜善也、雜行也。發菩提心菩提、是大善也、正行也、正業也。応<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>。  
(四四丁左―四五丁右)

ここでは、无菩提心の行がすなわち少善根であると述べられており、菩提心の有無によって少善根を意味づけている。また「隨縁雑善」については、

「隨縁雑善恐難生<sup>ト</sup>」者、是上<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>簡<sup>ル</sup>之少善根也。不發菩提心諸善<sup>ナルガ</sup>故云<sup>ニ</sup>「隨縁雑善」。  
(五五丁右)

とあり、すなわち、「少善根」と同様に、菩提心の無い諸善を指して「隨縁雑善」と理解していることが窺える。

### 小結

以上、本稿では『法事讃疑芥』巻三の「少善根」「隨縁雑善」の理解に着目し、それを九品寺流の諸師に広げて検討を加えた。まとめると次のようになる。

一言に九品寺流といっても、その内実はそれぞれが異なった理解をしていることがわかる。その一方、法然と比較した際には、九品寺流全体としての特徴を見ることができると言える。まず法然は「少善根」「隨縁雑善」とともに雑行、すなわち行そのものを指す語として定義する。それに対し、九品寺流の諸師は、行の修し方や、三心あるいは菩提心の有無に関連させて両者を定義しており、基本的に行そのものを指して「少善根」あるいは「隨縁雑善」とはしないのである。

最後に、九品寺流という枠組みそのものについての私見を述べておきたい。筆者は以前、長西・阿弥陀房・道教の三師について、第十八願の「十念」理解の相違を指摘したことがある<sup>14</sup>。それに加え、本稿で扱った「少善根」「隨縁雑善」釈においてもこれだけ相違が見られることに鑑みると、そもそも彼ら自身に九品寺流という一門流としての意識があったのか、という点も改めて検討される必要があるように思われる。特に阿弥陀房については、「私云」として、長西の理解を批判する記述も多く見られ、本人に長西の門弟としての意識があったか疑わしい部分があると考えている。紙数の都合から、本稿では詳細な検討がかなわなかったが、今後の課題としたい。

### 付記

小論は、公益財団法人三菱財団の第四八回（二〇一九年度）人文科学研究助成による成果の一部である。また、小論の執筆にあたり、金沢文庫御当局には格別のご高配を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

『法事讚疑芥』卷三翻刻

(佐竹・赤松・西村・井上)

【凡例】

- ①本翻刻は、称名寺聖教『法事讚光明抄』の卷三（94函4―3）を翻刻したものである。
- ②漢字は新字の通行体に統一し、略字（合字）は正字に戻して翻刻した。
- ③各丁数は〈〉で括って示し、行取りは原本に準じて行頭に行数を示した。
- ④訓点・合符は原本に付されている通り翻刻したが、スペースに関しては必ずしも原本にはよらず、原則として見出しの前後および問の直前、科段等に適宜私的に付した。ただし、何れの場合も行頭には付さなかった。
- ⑤補記や訂記は本文に反映して翻刻した。
- ⑥翻刻に使用した各種記号が示す意味は次の通りである。  
・□□ ↓湮滅  
・「……」 ↓本文に付された省略符合箇所
- ⑦引用文については、管見の範囲で確認し得た出典を（ ）内に割書で示した。
- ⑧写誤や脱字など、意味が通らない箇所が散見されるが、本翻刻では史料性に重点を置き、明らかな誤りと判断できた場合でも校訂はしなかった。
- ⑨特に必要な情報を示す場合、脚註に記した。

〈一丁右〉

- 01捨彼莊嚴乃出閻浮等事
  - 02疑云一切諸仏皆捨无勝土出閻浮歎答不爾今□□□□
  - 03或現真形无利物等事 疑云現真形何无利物歎□□□□
  - 04又或本云而利物何為正歎 有流見解乃四千門□□□□
  - 05淨土者八万四千門撰歎答爾也 門々不同乃還是□□□□
  - 06非別之義如何答於法常同常別二義具足謂如來内証常平
  - 07等因諸法非別二對機隨情常差別因諸法各別也是一法二義也
  - 08常同常別法界法爾古今道理之謂也守護章（卷下、六）云若无平等一之差別。
  - 09□順仏法一惡差別若无差別一之平等一不順仏法一惡平等一又同者為
  - 10□□不二之義為種類相似之義一答今種類相似義歎但宗々意異也
  - 11□□唯心云宗一天台仏因仏果云宗一此等意可云一体義也律藏戒品
  - 12□□摩為宗一（修善）此一教立宗一也此宗一切教說止惡修善一此教
- 〈一丁左〉
- 01□□意可云相似□義一也事相教故天台菩薩戒疏（卷上、五六七頁上）引
  - 十二門論云
  - 02□□多止行收尽諸惡莫作即是戒門修善奉行即是勸門一
  - 03□□花嚴唯心為宗与法相唯識為宗有何別歎答花嚴第九識分歎
  - 04法相第八識分也 同故即是一是慈悲心等事 疑云同故何為如來致別
  - 05故何為慈悲歎答如來悟故悲同一凡夫迷故見別一故同約仏内証一別
  - 06約外用慈悲也流転前同為本一差為後一還滅前一差為本一同為後也
  - 07又致者何義歎答宗旨宗致義也 又淨土門者為如來致為慈悲心歎
  - 08答慈悲心也總聖道淨土對機隨情教皆慈悲心也□□□□
  - 09何文意歎答依如是我聞一歎□云總標一經大意歎□□□□
  - 10高撰下讚云下撰高讚云者如先之料簡也已下准□□□□